



No. 123 2016. 7

(株) よかネット

NETWORK

- 防災・減災の基礎力を高める～熊本地震を踏まえて～ 2
- 熊本地震被災地調査に行く
未指定の歴史的建造物の復旧・保存をどうするか 5
- 空家化する前の予防をどう行うか
～遠賀町空家等対策計画の報告～ 6
- 中間支援で社会課題を解決していく
～NPO 法人ミディエイドの取り組み～ 8
- 人材育成に力を注ぐ台湾の農村再生 10

見・聞・食

- 台湾のソフトパワー強化の取り組み
～松山文創園區、華山 1941 文創園區～ 13
- 烏山頭ダム、八田與一氏の銅像をみて思う 15
- 台湾紀行 16
- 糸島市の福吉地区で2回目の農園チャレンジ
「福ふく体験農園」の取り組み紹介（準備編） 19

近況

- 比叡山延暦寺、修行の道を50km 走る 21
- 有明海の新名所！？クモデ網漁を体験する 24
- 語り絵倶楽部～新宮町相島にてスケッチ 25

●身近になりつつあるNPOのための支援窓口

NPO や市民活動に対する中間支援について、九州・沖縄エリアで以下の2点についてみてみました。

①公設の市民活動支援センター（※1）の設置数の推移

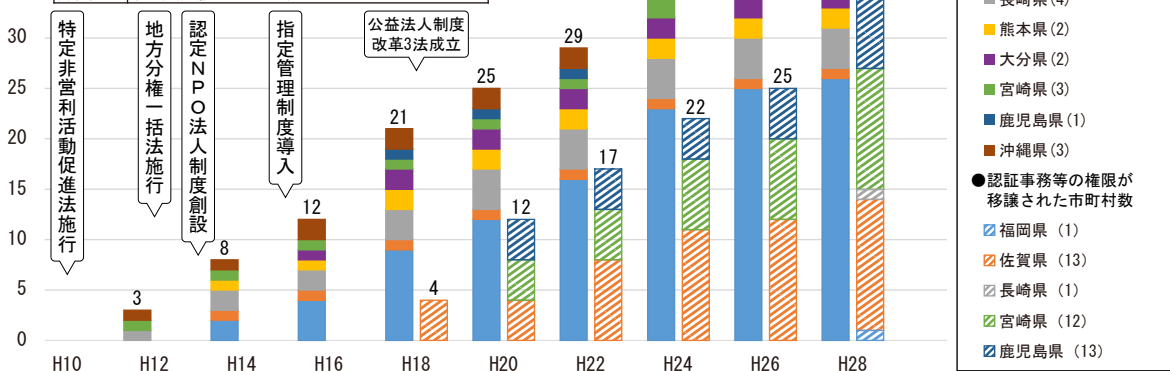
②特定非営利活動促進法に係る事務の権限が移譲（※2）された市町村数の推移

福岡県は県内22の市町にて26のセンターが設置されており、全国的に見てもその数は多いようです。一方、佐賀県、宮崎県、鹿児島県ではセンター数は多くないものの、10を超える市町へ権限移譲が行われています。

（センター数/移譲市町村数）

■市民活動支援センター内に認証等の手続窓口がある自治体

福岡県	福岡県NPO・ボランティアセンター
熊本県	くまもと県民交流館NPO・ボランティア協働センター
鹿児島県	鹿児島県共生・協働センター
沖縄県	沖縄県NPOプラザ
北九州市	北九州市市民活動サポートセンター
熊本市	市民活動支援センター・あいぽーと



※1：自治体によって設置され、NPO やボランティアなどの市民活動を支援しているセンターのこと。福岡県 NPO ボランティアセンター HP、日本 NPO 支援センター HP 及びインターネット上で把握できたもののみ。平成 28 年センター数には設置年度不明のもの（福岡県：1、宮崎県：1）を含む

※2：地方分権改革により、住民に最も身近な行政主体である市町村が、地域における行政の自主的かつ総合的な実施の役割を担えるようにするため、都道府県の事務・権限の移譲の取組が進められている。特定非営利活動促進法に係る事務についても、NPO 法人設立及び定款変更の認証等の権限が市町村に移譲されつつあり、平成 17 年全国初の静岡市への移譲以降、平成 28 年 4 月 1 日現在、25 道府県 291 市町村で実施されている。

防災・減災の基礎力を高める

～熊本地震を踏まえて～

山崎 裕行

●地震直後の様子

4月14日(木)、その日は会社で勉強会があり、講師を囲んでの懇親会を楽しんでいた。時間は午後9時半近くだったのだろうか、突然、スマホから「ビー、ビー」と、けたたましい音が鳴り響き、「地震です」との音声の流れ、間髪入れずに、長く、ゆったりとした揺れが襲ってきた。東日本大震災の時は、京都市内で地震を体験したが、その時よりも長く揺れを感じた。長い揺れを経験したのは初めてで、気持ち悪く感じた。

日頃、防災・減災についてお話をさせて頂くこともある身としては、大変、恥ずかしいことだが、最初は「何が起こったのだ？」という感じだった。すぐにスマホで情報を収集し、地震の規模と震源地に驚いた。「南海トラフ」や「日向灘」の地震は、見聞きすることはあっても、「日奈久・布田川断層」による地震はほとんど聞いたことがなかった。

後日、熊本地震が起きた後にフェイスブック等で紹介されていた「九州の主な活断層」の新聞記事が手元にあったので改めて読み返してみると、数ある断層の中で30年以内の地震発生確率では最も高い断層（発生確率全国最高）として紹介されていた。情報提供されていたが、この断層による地震が起こるかもしれないと意識できていたかと言われると、出来ていなかったと言わざるを得ない。

地震直後、公共交通機関も止まってしまうので、懇親会はしばらくして解散した。幸いなことに、講師をはじめ、関係者には大きな被害はなく、私も自宅や実家は無事であった。

翌日も、朝から揺れが続いていたが、緊急地震速報が鳴るような大きな揺れはなかった。しかし、4月16日(土)の深夜、ようやく眠りについた頃に、再びけたたましい音が鳴り響き、

飛び起きた。そして、連続して強い揺れを感じた。建物は新耐震RC造なので崩れるという不安はなかったが、いつ揺れるのだろうか（緊急地震速報が鳴るかもしれない）ということが気がかりで、なかなか落ち着かず、あまり寝られなかった。朝になり、福岡市近郊に住む両親に連絡して様子をうかがうと、「いい加減揺れは収まらないのか」「ソファの揺れが、地震の揺れと同じようで気持ち悪い」「生きた心地がしない」とのこと、だいぶと参っている様子であった。私からは「もう少し揺れは続くだろう」「倒れてくるものが無い部屋で過ごす」「部屋のドアは空けておく」ことなどを伝えた。

大雨や台風には慣れっこだが、地震は滅多に無い。平成17年に西方沖地震があったが、その時は両親ともども関西にいたので、直接、経験したわけではない。これほど大きな揺れを経験したのは、初めてのことだった。

●自分・家族で出来ることを今一度、考える

地震発生から2ヵ月以上が経過し、発生直後、頻繁にあった熊本や大分を震源とする地震も少し落ち着いてきたように思う。地震は、いつ、どこで、どのような形で起こるか分からないことを改めて知らされた。今回も、熊本を震源とする地震と思ったら、大分でも起こり、熊本の地震と大分の地震の関連性が指摘されたかと思うと、今度は、宮崎を震源とする地震も起こった。「地震は日本のどこでも起こる」ということを改めて認識し、備える必要性を感じた。

では、どう備えるか。日本の防災分野の第一人者の講演を聞く機会があった。その時に、「危機管理意識の向上」ということ、「あまりお金をかけない身の守り方」という話があり、後者の文化を根付かせる必要性を指摘されていた。

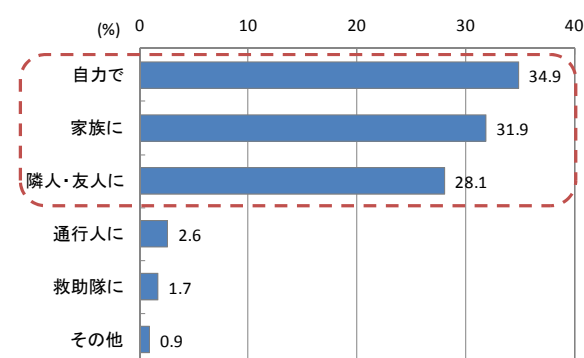
いつ、どこで、どのような形で起こるか分か

らない地震に対して、お金をかけることに躊躇してしまう。私も、今の住まいや実家でしっかりと耐震対策が出来ているかと言えば、そういうわけではない。でも、先生がおっしゃったように、あまりお金をかけなくても出来ることは色々あり、それをするか、しないかでは大きな違いを生む。

例えば、地震が起きても物が倒れてこない（仮に倒れてきても死なない）スペースを作るということは、物の置き場を変えるだけなのでお金はかからない。レースのカーテン等をしておけば、ガラスの飛散防止になる。簡易トイレの作り方を知っておけば、我慢せずに済むし、加えて定期的に体を動かす重要性を知っていれば、エコノミークラス症候群の発症可能性は減る。備蓄（水や缶詰、非常食、コンロなど）も、定期的に使い、買い直す（ローリングストック法）ことをすれば、いざという時に美味しい食事を得る訓練にもなるし、無駄にはならない。新聞紙は、保温に使えるし、怪我をした際に固定する道具にもなる。段ボールやブルーシートがあれば、避難所等での間仕切りにも使える。耐震化も、まずは耐震診断を受けて家の弱点を知っておくということが重要で、福岡県の場合は助成があり、数千円の自己負担で済む（詳細は、（一財）福岡県建築住宅センターまで 092-781-5169）。その後の耐震改修も、家の一部分を改修し、安全スペースを確保するという選択もある。もっと手前の話で言えば、ハザードマップで自宅周辺の災害リスクを確認したり、避難所と避難場所（以下、避難所等）の違いを知ったり、避難所等までの経路を確認する、避難所等の設備や備品を知る、家族との連絡手段を確認するなど、出来ることは色々である。

災害時は、何はともあれ自助（自分の命は自分で守る）が基本である。その上で、共助（隣近所、地域で支え合う）があり、公助（公的支援）は自助、共助があって初めて力を発揮する。助けられる側・支援される側ではなく、助ける側・支援する側に立つために、何が出来るかを自分自身、家族の間で確認、話し合っておくことが重要ではないだろうか。

生き埋めや閉じこめられた際、誰に救助されたか



出典：日本火災学会
「1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」

●地域（コミュニティ）で出来ることを考える 場を作る

「困ったときはお互い様」という文化は、大事にしたい文化である。けれども、日頃から声を交わしたことがない相手に、「お互い様」という気持ちになれるだろうか。少なくとも私はなれないので、挨拶を心がけている。「おはようございます」「こんにちは」「こんばんは」といった挨拶は、近所付き合いの入口であり、最低限のことだと思っている。挨拶は、日頃気持ちよく生活するためにも続けたい。

話を戻そう。災害の規模が大きくなればなるほど、みんなで助け合う場面は増えてくる。救出・救助や避難誘導、避難所等での生活（炊き出しや物資の仕分け、避難所の運営など）は、まさに助け合いである。1つのデータがある。阪神大震災の時に、「生き埋めや閉じこめられた際、誰に救助されたか」を調査した結果をみると、「自力」や「家族」という自助と、「隣人・友人」という共助が9割を占める。1人ひとりが無理をしない範囲で（誰かに責任が集中しないように）、何が出来て（何が出来そうで）、何が出来ないかを予め話し合い、それをもとに訓練しておくことが備えとなる。よく、「災害時は日頃の訓練以上のことは出来ない」と聞くが、まさにその通りであろう。

また、これもよく言われるが、発災後3日間は、公助はあまり機能しない。決してサボっているわけではない。その間、公的機関は被災状況の収集や人命救助に必至に、全力を挙げて

取り組んでいるので、避難所等の運営支援まで十分に力をさけないのだ。3日間を乗り切れば、全国からボランティアや応援職員が集まり、公助が機能するようになる。

その意味で、地域・多世代間で「発災後3日間をどのように乗り切るか」という視点で、話をする場があると、どういう不安や悩みを解消したり、和らげたりしたらよいかが見えてくるのではないかな。実際、昨年度お手伝いさせて頂いた地域では、地震・津波避難を考える際に、地域の役員だけで考えるのではなく、子育て世代の方や高齢者の方、保育園の先生方などと話し合う場（座談会）を開催し、それぞれの立場の意見を聞くことで、地域として何が出来るか（しないといけないか）を絞り込んでいる。地域間で話合うことで、役割分担のあり方も見えてくるだろうし、災害時に出来ることが分かり、支援して欲しいことも明確になる。結果、スムーズな支援にもつながると思われる。

●事前の備えとして地区防災計画

話し合ったり、考えたり、実際に訓練して確かめた内容をその場限りとするのではなく、継続的に見直して、質の向上を図っていく、そのためのツールの1つとして地区防災計画がある。

地区防災計画制度は、平成25年の災害対策基本法の改正により、新たに設けられた制度である。この制度では、コミュニティの居住者及び事業者自身が、地区の特性（土地、災害、人口、産業など）を踏まえた上で、防災活動に関する計画を策定することとされ、行政から地域にお願いして作る計画ではない。地域から行政に提案するボトムアップ型の計画となっているため、策定は必須ではない。しかし、平常時や発災時、そして、公助が機能するまでの間の活動を、予め「地区防災計画」として取りまとめ、市町村に提案し、「地域防災計画」に位置付けておけば、定期的に見直す動機付けにもなるし、行政との防災・減災に関する対話のツールにもなる。そして、何よりも策定するプロセスにおいて、色々な立場の人と話し合ったり、災害図上訓練（DIG）や避難所運営訓練（HUG）をしたり、まちあるきなどをするようになるの

で、地域の防災・減災力の向上につながる。全国的には幾つか事例があるが、九州で取り組んでいるところは少ない。内閣府では、この地区防災計画の普及を目的として、モデル事業を26年度、27年度と実施したが、九州では僅か2事例のみである。このような制度も上手く活用しながら、防災・減災に関する意識を高めることが望まれる。（地区防災計画の詳細は、内閣府HP <http://www.bousai.go.jp/kyoiku/chikubousai/>）

●現地活動だけが災害ボランティアではない

大規模災害が起きた時、災害ボランティアの活動は大きな力となる。東日本大震災をはじめ、過去の地震災害や、豪雨災害等においてもボランティアの皆さんの活動が地域の復旧・復興の支えとなってきた。ただ、災害ボランティア＝現地活動かといえば、必ずしもそうではない。もっと多様であるはずだ。

私自身、どこか固定観念があり、これまで現地で活動しないと災害ボランティアではないとの想いを持っていた。しかし、今回、福岡市の災害物資を仕分ける活動に参加することで、そこに集まっている人々の思いに触れ、また一緒に活動している姿を見ると、被災地のために自分で出来ることを、出来る範囲でしているのだから、これも災害ボランティアだろうという想いに至った。そうすると、こういう活動以外にも、被災地域の産品を購入したり、時期を見計らって観光に行ったり、また、義援金や支援金を募ったり、寄付したりするのも、ボランティアと言えるのではないかな。SNS上に溢れている支援を求める声と、支援するという声を整理し、マッチングにつなげることも、該当するだろう。そういうことを考えていたところ、5月11日（水）に、福岡県NPOボランティアセンター等が主催で「熊本地震復興に向けたボランティア事前セミナー」があり、そこで直接的・間接的な支援の話があった。まさにそれも含めてボランティアであるとの話を聞くことが出来た。災害ボランティアをそのように考えると、1人ひとり、また企業をはじめとする組織で出来ることが格段に広がるように思う。今一度、何か出

来るかを考え、実行に移したい。

●基礎力を高める

災害には、これまででも、そして、これからも向き合っていくことになる。ある日突然、大雨や豪雨、地震などがこの世の中から無くなることはない。だからこそ、災害から身を守るための基礎力を高めることから始めたい。

例えば、各市町村では、住民に手にとってもらえるように、そして、開いた時に分かりやすいように創意工夫してハザードマップを作成している。まずは、それを開いて、住んでいるところの災害リスクを知る。避難所等も載っているので、その場所も覚えておく。また、ハザードマップには、大雨や土砂災害、津波など災害別にその特徴や対処の仕方について解説されているのでそれを読む。さらに、非常持出品とし

て準備したらよいものや、災害時の連絡手段が載っていたりするので、それを元に持出品を準備したり、家族と確認しておく。実際に、大雨や豪雨の恐れがある場合は、テレビのdボタンを押して、最新の気象状況、雲の動きを把握する。「大雨が降り続くかもしれないな」と少しでも思ったら、早目に避難の準備をする。避難は、避難所等に避難することだけが避難ではなく、2階以上の安全な所に避難することも避難なので、その時々状況に応じて判断する。

このような自助に関わるのが、もっと普通のこととして広まると、被災後の状況も随分と変わってくるのではないかな。これからも、色々な業務を通じて、防災・減災の基礎力を高めていきたい。

(やまさき ひろゆき)

熊本地震被災地調査に行く 未指定の歴史的建造物の復旧・保存 をどうするか

山田 龍雄

5月の下旬、福岡県建築士会まちづくり委員会の中島委員長より電話がかかってきた。

「九州大学、福岡大学等の歴史系の先生たちから歴史的建造物の被災状況を建築士会と協力して調査できないかとの要請があった。日程は5月11日と12日の2日間、それぞれ3名ずつ出したいので、山田さん、1日だけでも行ってもらえないか」。

私が所属している建築士会まちづくり委員会では、中島委員長を中心にヘリテージマネージャー（歴史的建造物保存活用推進委員）の養成講座を3ヶ年実施してきており、修了証（年間60数時間の講座と私が見つけた登録有形文化財調査の報告書）を受理しているのは75名である。同じ教室で学んだヘリテージマネージャー修了生のネットワークをつくるため、福岡ヘリテージマネージャー会議を設立している。このような活動と中島委員長の人脈によって大学からお声がかかり、私も益城町の調査に同行することとなった。

東日本大震災後の半年後と1年後に被災地を訪れて感じたのは、その被害スケールの大きさであった。これは狭いテレビ画面では実感できないものである。今回も調査対象の歴史的建造物を巡る前に、地元ボランティアの人の案内で役場周辺の市街地の被災状況を見てまわった。

やはり、その被害の広さと倒壊の多さに圧倒された。ある市街地の中の道路沿いでは、ほとんどの家屋が倒壊し、電柱も傾いているところもあり、その1カットを取り出した風景は、戦後の焼け野原をセットにした映画の1シーンのようでもあり、一瞬、これは現実なのかと立ちすくんだ。



全壊状態の専寿寺 国、県等の指定を受けておらず、復旧保存費をどう賄うのか



全壊状態の木山神社。地域のシンボルとなっていた神社。拝殿はいち早く解体していた

今回の歴史的建造物の被災状況調査は、国や熊本県等の指定を受けていない神社・仏閣を中心に行われた。

午前中に専寿寺^{せんじゅじ}、木山神社の2箇所、午後は皆垂寺^{かいじようじ}、仏誓寺^{ぶつせいじ}の2箇所、計4箇所を調査した。

午前中の2箇所は、揺れが激しかった市街地にあったため、本殿は全壊状態であり、今後、歴史的建造物としての復旧を、どうするのが大きな課題である。

皆垂寺と仏誓寺は、市街地から離れたところに位置していたため、全壊は免れたが、柱は傾き、壁はかなり崩落している状態であった。

歴史的建造物では何らかの文化財指定を受けなければ、復旧の助成資金が支給され、丁寧に解体され、復旧・保存が可能となる。

しかしながら、何の指定も受けていなければ、復旧資金はゼロである。すべて檀家さんか、地域の人の浄財で復旧・保存するしかない。

指定されていない歴史的建造物は、一般住宅と同じように危険建造物の張り紙を貼られると公費の解体費が助成されるため、所有者は一辺に解体の方に傾くこととなる。

早急な解体にならないよう、文化財指定を受けていない歴史的建造物に対しても復旧支援の資金の目処が立てられると、所有者も解体か、復旧かの選択の余地が残されるので、多くの歴史的建造物が解体される方向から救われる可能性が高くなる。

歴史的建造物に関しては文化庁が中心となって復旧支援委員会を立ち上げ、早急な対応をし



かなり傾いている皆垂寺の鐘楼、支える石垣もかなり崩壊していた

ていくこととなっており、資金としては「文化財保護・芸術研究助成財団」の資金と関係者からの寄付金・義援金から賄われる事となる。しかし、果たして未指定の歴史的建造物にどの程度の資金が回ってくるかは、今だ不透明である。

全体の復旧支援予算の中から一部を歴史的建造物の保存のために資金提供がなされるようなシステムを構築しておくことが重要であると思う。そのような意味も含めて、早急な国や県の判断が必要ではないかと思う。

(やまだ たつお)

空家化する前の予防をどう行つか —遠賀町空家等対策計画の報告—

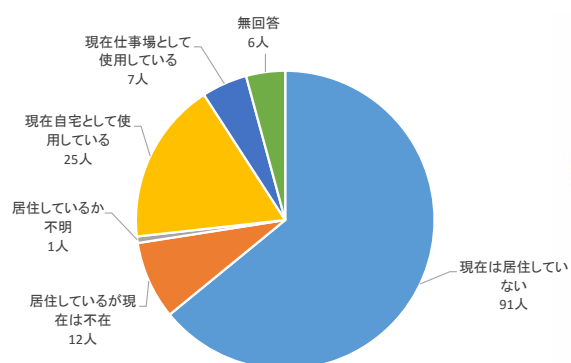
本田 正明

●定義の難しい空家

昨年度、遠賀町の空家等対策計画の策定に関わらせてもらいました。以前、中間報告をしましたが、ようやく計画が策定されましたので、最終報告をしたいと思います。

今回、空家の実態調査を行いながら、難しさを感じたのは、空家の定義と把握です。空家等対策特措法には定義として、「居住その他の使用がなされていないことが常態」とあり、1年以上使用されていないことが目安とされています。ただ、実際には病院に1年以上入院されている家や倉庫として放置されている家などがあり、判断が難しい住宅が多く見られました。遠

住宅の使用状況について（n =142）



平成 27 年 11 月調査

賀町では戸建て住宅のうち、調査によって空家と判断されるものを「空家」として表記しています。

●地域と連携した空家の把握

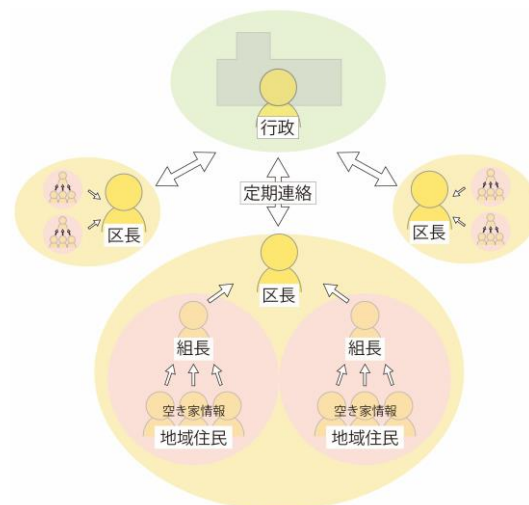
住宅の管理者を対象にしたアンケート（142件 / 219 件（回収率 64.8%））では、「自宅として使用している」という回答が 25 件（18%）もあり、目視で空家を把握することの限界も感じました。また、水道の閉栓状況や町外の納税者などのデータと見比べると空家全体の 4 割程度しか関連しておらず、実際には居住しているケースが多くなっています。区長や近隣居住者の情報の方が精度が高い状況でした。確認作業で再度空家を見てまわった際には、台風の影響で建物の劣化が急速に進んだり、解体されたものがあるなど、空家の状況の変化の早さも感じました。

行政単独で空家の状況を常に把握するのは困難なことから、今回の計画では行政区長や組長、地域住民と連携し、自主防災活動や環境美化活動の際に、空家を把握してもらい、区長会を通じて定期的に空家に関する情報交換を行うようにしました。地元住民に普段の活動の「ついで」に行ってもらうことで負担の軽減を図っています。倒壊等の危険性の高い空家については行政が定期的な点検を行ったり、新規の空家には老朽度調査を実施するなどの役割分担を行うことにしています。

●近居需要に対応できないか

遠賀町の空家の特徴として、昭和 40 年代に開発が集中した市街地で空家が増えています。

空家を把握する体制イメージ



特に中心部で開発が早かった新町や遠賀川などの行政区では間口が狭かったり、駐車台数が少ない空家が多くなっています。地元の不動産会社にヒアリングしたところ、親の介護や子育てなどでの近居需要があり、駅近くの物件を求める人は多いのですが、不動産情報がほとんど出てこないという話でした。

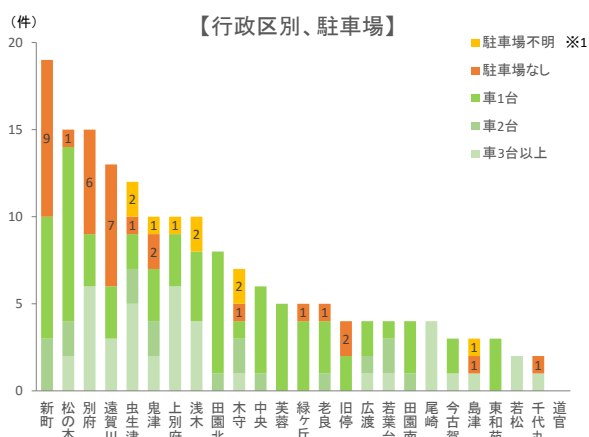
一方で住宅の管理者のアンケート結果では、賃貸や売却の意向が 3 割近くみられます。市街地の物件も少なくありません。不動産会社は登記簿情報以外に所有者を特定する手段がないため、需給のギャップが生じていました。

多くの自治体では、空家バンクを立ち上げ、空家の登録を行い、民間事業者に斡旋をお願いしています。遠賀町では、民間需要が見込めるため、空家バンクをあえて作らず、不動産会社等と守秘義務を含めた協定を結び、賃貸売却意向のある所有者情報を提供することで、空家物件の流通が進む仕組みを構築しようとしています。不動産会社間の不公平感が出ないような制度設計はこれからですが、空家バンクに関わる行政職員の経費が削減できるのではないかと期待しています。

●計画策定プロセスも空家解体につながる

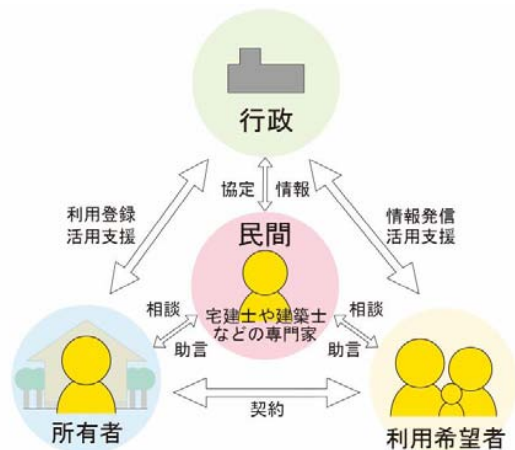
遠賀町では、倒壊等の危険性がある「特定空家」は 1 軒しかありませんでした。調査時点では 3 軒あったのですが、計画策定中に 2 軒解体されました。特に行政から解体の協力をお願いしたわけではありませんが、当時メディアを通

空家の行政区別駐車台数



※1 調査時に雑草の繁茂などで駐車スペースが確認できなかったもの

空家の市場流通に向けた体制イメージ



じて空家問題がクローズアップされていたり、アンケート調査を配布していたこともあり、解体を後押しした面があります。計画の策定プロセスそのものもマネジメントにつながると再認識しました。残る1軒の特定空家についても、所有者と協議を行っているそうです。

特定空家がほとんどないため、遠賀町がもっとも力を入れる必要があるのは空家化の予防です。不動産会社との協定により、市場流通を促すことが一番ですが、その手前に、相続や改修費用など、さまざまな問題を相談できる窓口を設置しようと動いています。私自身、空家活用を実際にお手伝いしていることもあり、所有者との意見調整や誰の負担でどこまで改修するかなど、空家の活用面でのマネジメントの難しさを感じています。今回、制度設計した計画が、少しでも早く軌道に乗るよう今後もお手伝いできればと思っています。（ほんだ まさあき）

中間支援で社会課題を解決していく ～ NPO 法人ミディエイドの取り組み～

櫻井 恵介

特定非営利活動促進法が平成10年に施行され、公益的活動を行う非営利団体が法人格を取得できるようになりました。以後、18年間の間に着実に数を伸ばし平成28年4月30日現在内閣府HPによると、50,902のNPO法人が認証され、様々な分野で公益的な活動を行っています。

そのような背景の中、弊社業務でもNPOが行う事業のサポートや地域と各種団体の協働に対する支援など、NPOあるいは中間支援に少なからず関わりがあります。

そこで、福岡県NPOボランティアセンターで相談業務委託を受けながら、法人独自事業でも様々な中間支援業務を行っているNPO法人ミディエイドの森重裕喬氏を講師に迎え、「中間支援とは？—なぜNPOの活動に支援が必要なのか—」と題して勉強会を開催し、NPO法人が行う中間支援の最前線の話をお聞きしました。

●中間支援はなぜ必要か？

そもそも、なぜNPOに対する中間支援が必要なのか、その背景には大きく次の3点が挙げられるようです。まず、一般的には社会課題が十分に認知されておらず、全体像を伝えることが分野ごとの団体には難しいことがあります。次に、社会課題は複雑化・複合化しており、その解決のためには異なる主体との協働が必要となりますが、立場の違いを当事者だけで乗り越えることが難しい場合が多いようです。最後に本来は社会課題を解決するための手段であるはずの事業ですが、現場では、事業自体の遂行が目的となりがちだそうです。

そのような課題に対して、中間支援組織は、単に相談や依頼された事業の成功を目的として支援を行うのではなく、「社会課題に対してNPOが力を発揮できる状況をつくる活動」（＝中間支援）を行い、団体の事業支援や仕組みづくりを行うことで、最終的に目的である社会課題の解決を達成するとのことでした。

●中間支援組織のための中間支援

そもそも NPO セクターにおける中間支援組織の種類には①民間中間支援組織と②公設中間支援組織の2つがあります。前者の民間中間支援組織は、それぞれが得意な分野や手法に絞って支援活動を行うスペシャリストの役割を担います。分野や手法を限定することで現場での直接支援や新しい取り組みに対しても柔軟な対応が行えます。

一方で、後者の公設中間組織は自治体等が設置する NPO 支援センターを指し、支援の対価が取りにくい初歩的な相談や情報提供等、幅広い対応を行うゼネラリストの役割を担います。そのため様々な団体の相談の受け口となりえるのですが、分野や手法を限定しないため、求められる知識とスキルは幅広く、経験の差等が大きくなってしまいます。

そこでミディエイドでは「多様な主体がより成果を出すための中間支援」として、特に公設の NPO 支援センターやその職員の支援力向上を重点に活動しているそうです。センターの支援力を上げることによって、結果的に現場で活動している NPO の社会課題解決につなげていく、いわば中間支援組織の中間支援を行うことで「多様な主体が協働する市民社会の実現」を目指しているそうです。

具体的な業務では、相談・主体間のコーディネートなど NPO 支援事業として「福岡県 NPO ボランティアセンター相談業務」「志免町まちづくり支援室運営」、NPO やボランティアのネットワーク支援としての「VCN ふくおか」をはじめ講師派遣や行政アドバイザー派遣等を実施しています。

●最後に

入社前、1年間福岡県 NPO ボランティアセンターで非常勤相談員をしていました。相談内容は多岐にわたっており、最初の頃は苦労した覚えがあります。特に NPO 法人を設立しようとして相談に来られる方の中には、問題意識は強いけれども、実際に行動するための手段がわからないといった方が多くいたように思います。そうした中で話を聞き外部の視点から状況を整理

●中間支援のイメージと特徴



●ミディエイドで行っている中間支援のイメージ



し計画を組み立てるというのは、現在の業務にも共通するところだと思います。

ところで中間支援というと、NPO に対する後方支援が一般的でした。実際に平成 13 年に内閣府が実施した「中間支援組織の現状と課題に関する調査」では、中間支援組織のユーザーは主に NPO 法人とされていました。

しかし、現在では多様な中間支援の形が生まれています。例えば、今回話を聞いたミディエイドのように中間支援の裾野を広げていくための、公設の中間支援組織に対する支援であったり、NPO 法人ではなく、地縁組織や地元企業を対象とした支援や営利組織である株式会社による支援など、中間支援の形は多様化しているようです。

そうしたなかで、弊社としてもこれまでのノウハウやネットワークを活かした中間支援の実施や NPO セクターや中間支援組織との協働も可能性があるように感じます。

例えば、昨年度まで NPO 法人であるグラウンドワーク福岡と一緒に進んでいた青峰団地での空き家対策に係る一連の事業はそれに近いものがあるように感じます。地元住民が取り組む空き家対策として、地域の実態把握から計画までをプランナーが担い、その計画を受け、NPO セクターの中間支援組織が実施する具体的な活動や事業のサポートを伴走型でコーディネートしていくようなこともできそうです。

それ以外でも、大小様々な協働あるいは支援といった場面が考えられます。

特に昨今の地方創生の中で多様な主体が関わりあうことの重要性が再認識されている中、自分としてどのような関わり方ができるのか、これから考えていきたいと思います。

(さくらい けいすけ)

人材育成に力を注ぐ台湾の農村再生

山田 龍雄

昨年度、弊社では5市町村で地方創生「まち・ひと・しごと」の計画づくりと「人口ビジョン」のお手伝いさせていただいた。

我が国の人口は2050年（平成62年）には1億人を下回り、2060年（平成72年）には8,674万人、高齢化率39.9%になると予測されている。特に地方都市においては東京の一極集中とあいまって人口減少が著しくなり、地域の崩壊といったところも出てくるのではないかと危惧されている。

一方、台湾においても総人口のうち7割が中央政府直轄の6市（台北市、新北市、台中市、台南市、高雄市、桃園市）に集中しており、日本と同様に農漁村地域の人口減少が起こっているのではないかと推測される。

今回、台湾研修旅行を企画するにあたって、日本と同様に都市化が進んでいる台湾の中山間地の状況、活性化方策はどうなっているのかを知りたいと思った。

そこで、研修旅行のコーディネートをしてい



我が国の地域創生に関する報告をする弊社の原

ただいた天野宏欣氏（現：野村総研上海支社、元：福岡アジア都市研究所）を通じて国立嘉義大学景観学科の曾碩文先生に繋いでいただき、意見交換をする機会を得た。

会場には農学院院長の黄光亮教授、景観学科主任陳本源博士をはじめ、6名の先生方も参加されていた。

最初に、弊社の原が、我が国の人口減少の状況、地方創生の動き、弊社がお手伝いした自治体の実情と総合戦略の事業の概要を説明し、その後、台湾の農村再生について曾碩文先生から報告していただいた。

●台湾は急激に高齢化が進行する

台湾の2012年（平成24年）の高齢化率は11%（日本：2010年23%）であるが、合計特殊出生率が1.2と我が国の1.4よりも低く、今後、急激に高齢化が進む。

台湾1日目の松山文創園區の視察でお世話になった林靖蓉さんに出生率が低い理由を尋ねると「台湾では自立を目指す女性が多く、なかなか結婚、出産に至らないのではないかとのこと。これも台湾の出生率低下の主要な要因の1つではあるが、もっと多様な要素が絡まっているのではないと思う。

2060年（平成72年）の高齢化率は約39%となり、日本と肩を並べることとなる。都市化と高齢化率が同時並行して進展した場合、農漁村地域から若い人がいなくなり、都市部に単身高齢者が多く住むといった状況となり、地域の人口構成はアンバランスになると予測される。

台湾の農村再生は極めて重要な地域政策であり、台湾政府としても力を注いでいる。

●計画づくりの基本単位は社区

台湾においては、1994年（平成6年）に住民参加方式のまちづくり政策（社区营造政策）を

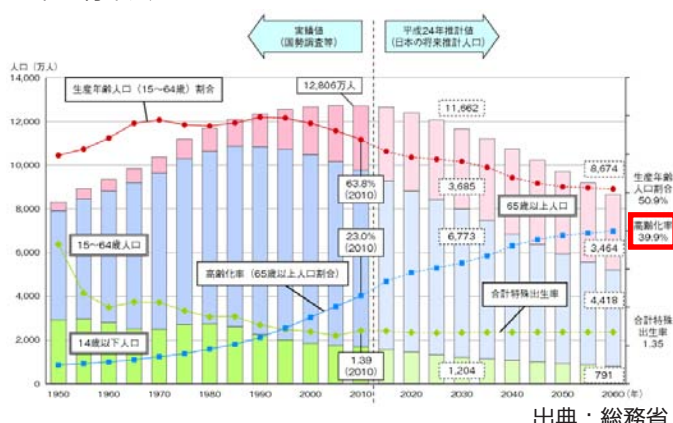
台湾の主要都市の人口と構成比

主な都市	人口	構成比
台湾全体	23,490,000	100.0%
台北市	2,704,810	11.5%
新北市	3,970,644	16.9%
台中市	2,744,445	11.7%
台南市	1,885,541	8.0%
高雄市	2,778,918	11.8%
桃園市	2,105,780	9.0%

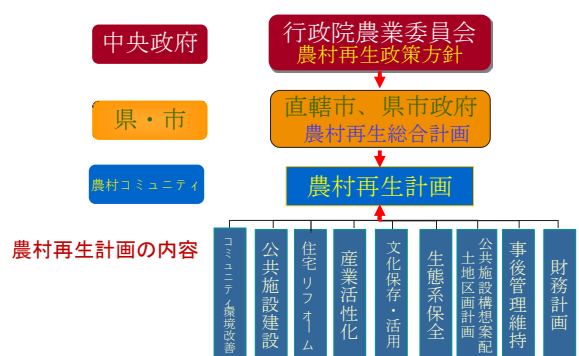
2015年12月末現在

計68.9%

日本の将来人口



農村再生の仕組み



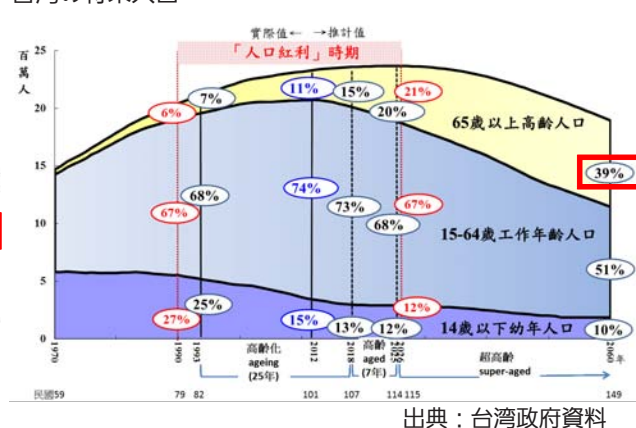
実施してから22年目、2010年（平成22年）に農村再生条例を施行して6年目となる。

報告を聞いたあとで、説明として何度も出てくる「社区」という概念がわからなかった。

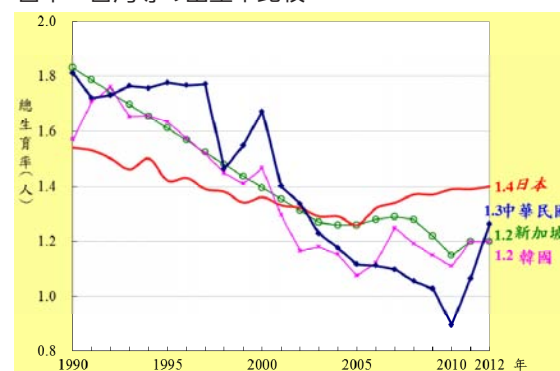
質問すると「日本の市町村の行政単位とは違って30～40戸の集落も社区にあたる」という。この説明でもよくわからないので、日本に帰ってから調べてみると「社区」は①一定の地域に住む人々によって構成され、②改革を通じて規模を調整した住民委員会の管轄区のこととなっている。日本の町内会や団地などの一定のエリア内での組織とも違うらしい。台湾ではまちづくりを「社区营造」といい（营造とはつくるという意味）、日本のまちづくりや米国のコミュニティデベロップメントなどを取り込んでつくった造語だそうだ。

現在、台湾で進められているコミュニティ形成・まちづくりは「社区营造」もしくは「社区総体营造」といい、台湾政府による1994年（平成6年）以降の取り組みから始まるといわれている。

台湾の将来人口



日本・台湾等の出生率比較



今回、嘉義大学でお聞きした農村再生の運動も、この住民参加方式の流れにある。

●幅広い分野の農村再生計画

農村再生の大まかな仕組みを表したのが左下図である。台湾中央政府の行政院農業委員会（以下 農業委員会）が農村再生政策方針を策定する。これに基づいて直轄市、県・市政府が農村総合計画を策定し、農村社区（コミュニティ）において具体的な農村計画を策定することとなっている。

その農村再生計画は産業活性化からコミュニティ環境改善など9分野と幅が広く、日本でいえば、農村集落版の総合計画といったイメージに近いようだ。

●計画づくりの前に人づくりから

農村再生計画を策定するためには、農業委員会水土保持局（以下、水保局）が実施する人材育成事業に参加し、修了することが義務付けられている。この人材育成事業を社区の人たちが受講しなくてはならない。この受講時間が92時間とロングランであり、その中身をみてる

人材育成のための 92 時間の受講カリキュラム

クラス	コア・カリキュラム	オプションコース	課程目標
入門クラス (6時間)	・農村再生計画及び関連法規説明	・農村開発事例紹介 ・初期コミュニティ課題ワークショップ	政策発表・理念の理解 (知る)
上級クラス (26時間)	・コミュニティ資源調査・コミュニティ地図製作 ・農村発展課題、対策、農村のメリット・デメリットの分析 ・農村開発体験観察研修 ・コミュニティ組織運営実務・討論	・農村整備概念及び発展実務の紹介 ・コミュニティ防災 ・農村歴史文献調査 ・気候変動と低炭素社会 ・農村開発運営技術・方法 ・生態コミュニティ概念・実務 ・政府リソースの検索・活用 ・その他農村再生関連コース	コミュニティを学び、 問題を掘り起こす (つかむ)
コアクラス (36時間)	・コミュニティビジョン分析及び具体的行動プラン策定 ・コミュニティ計画実務運用討論及び助言指導 ・農村美学 ・農村コミュニティ規約 ・コミュニティ従事者の雇用・活性化の実装	・コミュニティ防災計画 ・農村コミュニティ産業活性化 ・農村の多元的発展計画 ・農村再生条例関連法規紹介 ・農村再生計画初歩討論 ・低炭素社会の実践方法 ・その他農村再生関連コース	合意形成、コミュニティ形成 (広げる)
再生クラス (24時間)	・農村再生計画討論及び修正案 ・コミュニティ会議招集手法・実務運用 ・コミュニティ計画現場実務指導・助言	・その他農村再生関連コース	コミュニティビジョン、持続可能性 (分かち合う)

資料提供：嘉義大学景観学科

と、入門クラスから再生クラスまで4段階に分かれており、農村計画に係わるハード、ソフト等のカリキュラムとなっている。もし、私が受講したとしても、通常の仕事以外に相当、時間をかけないと卒業できないだろうという内容である。

しかも地域の規模によって受講しなくてはならない人数が決められている。たとえば、地区人口 400 戸以上（あるいは 1600 人以上）の地域は 40 人以上、200 戸以上（あるいは 800 人以上）400 戸未満（あるいは 1600 人未満）の地域は 30 人、200 戸未満（あるいは 800 人未満）の地域もしくは離島や原住民地域は 20 人以上と決められている。

この人数を確保しなければならない。受講者が高齢者で、途中で亡くなって 39 人となった場合は、あと 1 人の補充が必要となり、最初から受講してなくてはいけないといった場合も発生する。したがって、人材育成事業を完了するのに 2～4 年を要するというから、なかなかの長期計画である。

日本で集落の高齢者等を対象にこのような長期の人材育成事業をした場合、かなり抵抗があり、台湾のシステムでは実現化は難しいのではないと思うが、地域づくりは人づくりといった観点からみた場合、長期的には非常に効果の

ある方法のように思う。

嘉義大学の先生に聞くと、受講した人の中から地域のリーダーとなる人が出てくるといふから、効果はあるようだ。

この規程に基づいたプログラムを受講した地区のみが、農村再生計画を立案するための協議会を立ち上げられる。

各地区毎の農村再生計画を各県・市に提出し、審査を受けて、最後の確定計画を農業委員会水保局に提出し、実施の事業費が協議会に直接助成されることとなっている。

日本であれば、市町村が主導権をもって各自自治体の計画、集落の計画を立てる場合がほとんどである。日本の場合、計画立案に際しては、コンサルタントが入って、住民の意見を聞きながら計画を練ることはあるが、これもあくまで市町村主導での方法であり、住民自らというのは、意欲のある集落又は自治会等以外は、あまりみられない。

台湾は、この住民参加方式の計画づくりが、まさに徹底しており、日本と違っているのには別に背景があるのかも知れない。

この農村再生計画作成に関しては、自己資金 10%を用意し、農業委員会から最大 100 万円（日本円にして約 340 万円）の助成が受けられる。この自己資金を設けることは、地域のやる気が



嘉義大学景観学科の先生たちとの意見交換

試されるということで、良い方法ではないかと思う。

●実施事業は多岐にわたる

嘉義県では43の社区で農村再生計画を策定済みであり、毎年、実施計画を立て、実行している。

その社区の取り組みは、①景観に関すること、②防災に関すること、③観光に関することなど多岐にわたる。計画づくりに関しては、アドバイザーとして大学の先生やコンサルタントも入るようだ。

今回、説明していただいた嘉義大学の先生たちも、専門家としてアドバイザーとして農村再生計画に係わっておられ、結構、忙しいとのことであった。

今回は、弊社の研修旅行の嘉義大学との2時間程度の意見交換の中で得られた台湾の農村再生、住民参加方式の概要のみを報告したものである。ネットで調べると台湾の社区营造を中心とした村づくりについては、コミュニティ政策の研究機関を有する大学で結構、行われている。

実際に、この事業の成果、効果がどうなっているのかは気になるところである。機会があれば、社区营造について詳しい先生に聞いてみたいものである。

(やまだ たつお)

(参考文献)

- ・嘉義大学景観学科提供資料
- ・首都大学東京都市政策研究 8: 27-48 (2014-3-20)
- ・農村計画学会誌 32 巻論文特別集 (2013-11)
- ・工学院大学研究報告第 110 号 (2011-4)

台湾のソフトパワー強化の取り組み ～松山文創園區、華山 1941 文創園區～

山辺 眞一

台湾研修の目的の一つは、大規模工場跡のリノベーションにおける官民共同の取り組み「松山文創園區」、「華山 1941 文創園區」の視察であった。

台湾では1990年代に入り、景気の急速な悪化と人件費高騰による工場の中国への移動が顕著となり、国内の製造業流出、失業率の上昇に対して、政府は新たな対策として、「発展文化创意産業計画」を打ち出した。「文化创意産業」とは、Cultural and Creative Industriesであり、日本ではコンテンツ産業とも言われる。2002年「挑戦2008：国家発展計画」において、文化创意産業が台湾の発展において重要な柱とされ、2009年からは、4年間、300億元（約1000億円）の資金を投じ、テレビ、映画、音楽、工芸、デザイン、デジタル等の産業に投資、1兆元以上（約3兆円以上）の経済効果を目指す「創意台灣」政策が打ち出された。

この政策による国主導のプロジェクトが、台北市の松山や華山の園區、高雄、花蓮など各地の取り組みである。

●松山文創園區

松山園區は、1930年代に建築された煙草工場跡で正式には「台湾総督府専売局松山菸草工廠」で、1998年にたばこ需要減少等により生産停止



左建物は松山の煙草工場跡



松山の倉庫跡展示場と右奥に誠品生活の入居する台北文創ビル

となっていたものが再生利用されている。

2001年に台北市政府により市指定旧跡に指定されたのち、いろんな議論を踏まえて2011年松山文創園區に生まれ変わり、その年の秋に「台北世界デザインエキスポ」が開催された。

「国家発展計画」の文化創造産業の振興のため、2003年には財団法人台湾デザインセンターが設立され、デザイン力の世界へのアピール、海外進出の支援、異業種との交流、ブランド化支援など、ソフトパワー強化のための取り組みが行われている。この敷地の一角に、台湾の文化創造への貢献、知的な場所を提供することを目的とする「誠品書店」の新型店舗「誠品生活」が建築され、モノを売るだけでなく、実際に工芸品を作ってみることができるなど、日本の生活雑貨売場とは違った店舗運営が行われている。

ガラス工房で作品を作っている林さんによると、スペースの入れ替えなど、フロアマネジメントは相当に大変なようだ。この地区に今後はホテル導入の予定があり、園区内では巨大ドームも工事中であった。

●華山 1914 文創園區

華山園區は台北酒造工場跡の再生により整備された。クリエイティブデザインアトリエを中心に、展示センターや映画、コンサート等、質の高い生活の実現を支援する場所として多くの若者や内外の観光客が訪れている。

1999年に園區として演劇や創作の場、発表の場として活用が始まった。「1914」は園区内の



華山の工場跡展示場の外壁

最も古い建物が建てられた年で、それから100年経って再生したことから名付けられたそうである。

2009年頃から、カフェレストラン、ショップ、ライブハウスなども入居し、さらにクリエイティブな空間づくりが行われてきた。

日本では、歴史的な建物を再生する時には当初の建築を再現・修復を目指すものの、耐震化などが加味されることで、昔の味わいを残しながらきれいに修復されるが、コストもかかる。

一方、華山や松山の場合は、機能面で支障がない範囲で最小限の修復であり、壁などは傷んだまま、あるいは落書きも残るなど、使われてきた味わいも残されて、良い雰囲気である。同じような古い建物の再生でも、文化による違いを感じる。

●付加価値を高く創造的な産業へ

両園區をはじめ、台湾各地ではアートや伝統技術の力を活かして、付加価値の高い産業へ転換していくため、アートから商品化、起業化までの切れ目の無い支援の仕組みも作られている。

文化・芸術から創造的産業、観光産業の活性化、さらに世界に向けた情報発信という台湾のソフトパワー強化への取り組みをみて、台湾のソフトパワーと連携することで、九州のソフトパワーを強化し、活性化することができるかも、と思った。
(やまべ しんいち)

烏山頭ダム、 八田與一氏の銅像をみて思う

山田 龍雄

古来、名建築はその時代の人間の営みの機能性を高める器として、または都市のシンボルとして存在し、その名を残している。

一方、今でも語り継がれる土木工事は、やはりスケールが違う。人間の生命そのものに関係する水利工事などは、農業の生産力を高め、人々の胃袋を満たし、地域を豊かにしてくれる。それゆえ、その土木工事に携わった責任者やリーダーは偉人として後世まで語りつがれることとなる。まさに八田與一氏は、それにあたる人である。

また、「烏山頭ダム（別名：八田ダム）」をみると土木工学のことを、英語で civil engineering というのも大いに頷けるのである。

私が八田與一氏のことを初めて知ったのは、確か 15 ～ 16 年前である。会社の台湾研修旅行に行くことになった折、司馬遼太郎の「街道をゆく～台湾紀行」を読み、日本統治時代に立派な日本人がいたのだという認識しかなく、時間の経過とともに詳しい業績のことは忘れていた。

その後、6 ～ 7 年前に、弊社が加盟している地方シンクタンク協議会の総会とフォーラムが金沢市で催された。翌日に「金沢ふるさと偉人館」を訪ねたときに、八田與一氏が金沢市出身

であることを知り、展示パネルから台湾嘉南州への水利工事の規模の大きさと嘉南平野の農業生産に果たした役割を知り、大いに興味をもった。

八田與一氏は、1920 年（大正 9 年）から 1930 年（昭和 5 年）までの 10 年間かけて、不毛地帯であった嘉南平野を灌漑できるダムを建設し、水路を巡らせ、嘉南平野を台湾最大の穀倉地帯にした工事責任者である。

その水路の長さは 16,000km に及ぶ。ちなみに万里の長城は巨大とはいえ、2,700km に過ぎない。

八田與一氏は、日本統治時代ではあったが、台湾の農業発展のため、半生を台湾に捧げ、台湾の土となった人である。

その後、あるテレビ番組で八田與一氏の銅像が、太平洋戦争時の国家総動員法に基づく金属回収令のときや、中華民国の蒋介石時代に日本の残した建築物や顕彰碑の破壊がなされた際も、地元の人々が倉庫に隠し、守り抜いたとの逸話を聞いたときには、いつか八田與一氏の銅像、烏山頭ダムを見てみたいと思った。

今回の台湾研修旅行では 2 日目に嘉義大学を訪問することとなっており、嘉義大学から烏山頭ダムまでは約 40km と近い。これは折角の機会なので、旅程に八田與一記念公園を加えていただいた。

当日は嘉義大学での意見交換会後、タクシーに乗り、都市高速を経由すると約 30 分「烏山頭ダム風景区」に到着した。



ダムの堤防から烏山頭ダムを見下ろす



烏山頭ダムを見下ろす八田氏の銅像、後ろにひっそり佇むご夫婦の墓碑



八田邸の庭、台湾をイメージした池が配置されている



八田與一記念公園に接している道路は、八田路と命名されている

ここは、発電所などの既存の施設を取り込み、烏山頭ダムの西側に整備された景勝地であり、とにかく広い。この中に八田與一の銅像、八田與一記念公園、八田與一記念室等が点在している。

まずは、八田與一の銅像に向かったが、タクシーの運転手も初めて来たらしく、道を何度か間違えながらも辿りつくことができた。

タクシーの運転手も「ここには日本人は、めったに来ませんよ」とのこと。タクシーの到着地点から土手を上り、200 m程度歩くと、小高いところがあり、ここに烏山頭ダムを見下ろしている八田與一氏の銅像が鎮座している。その後ろには八田與一ご夫婦の墓がある。毎年、八田與一氏の命日である5月8日には、嘉南農田水利会の人々によって慰霊祭が営まれているという。また、台湾の中学生向け教科書「認識台湾歴史編」に八田與一氏の業績が詳しく紹介され

ている。八田與一氏は日本国内よりも台湾で有名であり、今では「台湾の農民の父」と呼ばれているという。

次に八田與一記念公園に向かった。この公園内にはダム工事中に宿舍などの関連施設を再現した建物が4棟建っている。

八田邸の玄関前には、願い事を叶えたいと思った人が祈願した板がぶら下げられており、八田與一氏は既に神格化されているようだ。

台湾の嘉義近くに行く機会がありましたら、八田與一記念館を訪れて見てはどうでしょうか。
(やまだ たつお)

台湾紀行

台湾でひとりぼっち旅行体験

千と千尋の神隠しのモデルとして有名な九份（きゅうふん）を見に行く日、見事にバスの集合時間に遅刻しました。

スマホのネット環境が回復した途端、「先に行くので追いかけてきてください」とのメッセージとたくさんの着信履歴。困ったというより、迷惑をかけたことが申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。どこか抜けた性格なので団体行動では、必ず迷惑をかけてしまいます。今回の視察旅行は後輩にまかせっきりだったので、ガイドブックすら持っていません。手元にあるスマホの情報が生命線です。レンタルしたWifiポケット（ネット環境を繋ぐ機器）を失くして集合に遅れたのですが、見つからないままだったと思うとゾッとします。

さて追いかけるにも、どうやって向かうかです。ネットで調べると高速バスを使う方法と台湾鉄道を使う2パターンがありました。バスは直行で行けますが、鉄道は乗り継ぎが何度か必要です。それでも台湾鉄道に乗ってみたい誘惑に負けて鉄道を選んでしまいました。駅で自動券売機にお札が入らず、切符の買い方がわからなかったり、空席のない特急列車に普通切符で乗って追加料金を取られたり、行き当たりばつたりの旅にはトラブルが多発します。ネットで



日本の電車とよく似た台湾鉄道

は特急を使った便利な方法は紹介されても普通列車を乗り継ぐ不便な方法をわざわざ紹介する人はさすがにいないのだとネット情報の限界を感じたりしました。

最寄り駅ではタクシーの運転手が「九份 200 元 (700 円くらい※) でいくよー」と客引きをしています。無視していると、「一人なら 50 元でいいよー」とどんどん値が下がります。バスに乗り始めるころには、バスの運賃と同じ一人 20 元になっていました。バス停には、台湾人と日本人の観光客が半々ぐらい。出発前にはバス停からはみ出るくらいの人ばかりになりました。わざわざ鉄道とバスを乗り継ぐ観光客も多いことに驚きました。

九份は思っていた以上に標高の高い場所にあり、狭くて観光客が密集しています。山の中にある市場みたいで。仲間にコンタクトを取ろうと電話をするも、混雑や騒音で気づかないのか、誰も出てくれません。スマホのバッテリーが心細くなったころ、九份のエリアと路地の狭さが味方をしてくれて、偶然にもメンバーに遭遇することができました。

若いころ、バックパッカーで数ヶ月間単位の自由気ままな旅をしていたせいか、少々のトラブルがあった方が楽しいくらいの気分で行動してしまいます。団体旅行では単なるトラブルメーカー、問題児です。行程がタイトなツアーだったら、間違いなく路頭に迷っていたでしょう。もう少し団体行動のできる大人にならないといけないかと反省した次第です。

(本田 正明)

※旅行時のレート、1 元 = 約 3.5 円で計算しています。

台湾・台北の公共交通

鉄分は海外であっても補給出来るならば補給する、ということで、今回の旅行では、MRT (都市鉄道) と台湾新幹線 (高鐵)、そして、タクシーに乘る機会があった。

まず、MRT。台北市内は地下鉄の移動が大変便利だ。主要な観光スポットは MRT で行ける。乗換駅も幾つもあるし、本数も多い。だいたい 5 分間隔で列車が来るので、乗換の待ち時間もわずかで、ストレスはない。そして、何よりも値段が安い (20 元 ~ 25 元で行ける)。切符の購入も、券売機があり、そこに行きたい駅までの運賃が載っているので、その金額を入れると切符が出てくる。券売機は、日本でも馴染みのあるタイプなので買いやすい。ただし、切符は見慣れないもので、一見すると青色コインである。これを、自動改札機でかざしてホームに入る。ホームから出るときは、また自動改札機があるので、そこに入れる。今回、バスには乗れなかった。市内では、バスも各地を結び、かなりの本数が運行されているようだが、ガイドブックを読むと車内で両替が出来ないので、予め準備する等の不便があるようだ。言葉や地理の不安を考えると、MRT の方が気軽に使える。

次に新幹線。台湾の新幹線は、台北から高雄まで最速 1 時間半で結んでおり、日本の新幹線がベースとなっている。車両も 700 系がベースであり、シートの色や間隔などもほぼ同じ。ということで、車両自体に目新しさは感じない。今回は、窓口で切符を購入したが、切符は、日本とほぼ同じ大きさで、出発地・到着地とその



新幹線の切符



黄色の車がタクシー

時間、車両番号、指定席番号が記載されていた。新幹線も自動改札となっているので、改札機に切符を入れて、出てきた切符を持って列車へ。日本と違い、ホームから出るときに、切符が改札機で回収されない。台北駅を出発すると、板橋駅までのしばらくの間、地下を走る。関東にお住まいの人はそうでもないかもしれないが、九州では新幹線が地下を走ることはないので驚いた。そこから地上に出て、最高速度 300 km で走り抜ける。新幹線は、市街地中心部ではなく郊外を走っているようで、市街地からのアクセスはそれほど良いとは感じなかった。日本に戻り調べると、市街地と新幹線駅は、バスで結んでいるようだ。

最後に、タクシー。料金も安く（台北市内は初乗り 70 元）、たくさん走っているので便利ではあるが運転は荒い。荒いといっても、スピードが速いとか、急ブレーキ、急ハンドルというのではなく、車間を詰める運転なのだ。私も、車間を詰めすぎと各方面から怒られるが、そんな私でもびっくりするくらい車間を詰めて運転する。それがなければ、快適である。また、日本のようにタクシー会社によってタクシーの色が異なることはなく、どこでも黄色なので一目瞭然で分かりやすい。ちなみに、乗るときは、手を上げて止めて、自らドアを開けて乗る。降りる時も、自らドアを開けて降りる。領収書が欲しいときは、その旨を伝えると（ファerpiao と言えば OK）もらえるが、日付や料金などは、自分で書く（日本のように機械式のタクシーもあった）。

本当は、桃園国際空港から市内への MRT があるはずで、乗るのを楽しみにしていたが、不具合があって延期が続いているとのことで、開通時期は未定らしい。次回行く時までには開通していることを願いたい。

（山崎 裕行）

台北から十分へ列車の旅体験

台湾 3 日目のスケジュールは、午前中自由時間で 13 時にホテル発で九份に行く事になっていた。

以前テレビで、両側がお店ぎりぎりの所を電車が通り、電車が通らない時間に線路内で、願い事を書いたランタンを上げる映像を見た事があった。

自由時間はそこへ行こう！

調べると、そこは十分老街という所だった。十分老街へは、台北から台湾鉄道で瑞芳という所まで行き、そこで平溪線に乗り換え、4 つめの駅、十分で降りる。

瑞芳という駅は、九份の最寄り駅でもあったので、その日は別行動にしてもらい、九份で合流することにした。

まずは台北駅の窓口で切符を買うのだが、中国語がわからない。紙に漢字で、時間、行き先、電車の種類（日本でいう特急）、枚数を書いて出したら、すんなり買えた。

次はホームがわからない。切符の販売所の横に案内所があったので、行くと日本語を話せる人がいて親切に教えてくれた。その人に買ったばかりの切符を見せると、日本では馴染みの無



台北から瑞芳までの切符。確かに真ん中下あたりに「八堵 以後無座」と書いてあった



電車がこない時間にランタンを上げる



九份に来たからには、見ておきたい光景

い事を言われた。3枚(3人)のうち2枚は、指定席が八堵という駅までしか取れていないので、そこからは立ち乗りになると。

空いている区間だけでも座らせるというのは、合理的ではある。ただ聞いてなかったら、八堵駅で乗ってきた人と揉めたかもしれないと思った。

とりあえず無事に電車に乗り、瑞芳駅で降りた。ここからは平溪線に乗り換えなのだが、『平溪線はこちら』のような案内が見当たらない。ホームを降りると通路が右と左に分かれていた。九份に行くには左らしいが、平溪線がどちらかは分からない。勘で右に行くと、当たりだった。

平溪線のホームには着いたのだが、ここから先の切符を持っていない。駅員さんに、『ジュウフン、ジュウフン』と言ってみるが通じない。壁に書いてあった十分の文字を指すと、理解してくれた。いったん改札を出て切符を買わなくてはいけないようだった。窓口で懲りずに『ジュウフン』と言ってみるが、やはり通じない。そこで私は、十分の文字を指したつもりだったが、80円の1日周遊券を買う羽目になった。十分までは20元ぐらいだったはずだから、往復でも40元。40元は勉強代と思う事にした。

ランタンの色には、いろいろな意味がある。お店により若干の違いがあるようだが、赤＝健康、黄色＝金運、青＝仕事、紫＝学業、白＝未来の成功、橙＝恋愛、緑＝順調、さくら＝幸福、桃＝人気。1色のももあるが、欲張りなので4色

のランタンに願い事を書いて上げた。

その後、台湾のナイアガラと呼ばれる十分大瀑布を見に行き、十分を後にした。

十分から九份までは、平溪線とバスで行く予定にしていたが、同行者がタクシーが安いからもうタクシーで行こうと言うのでタクシーで行く事になった。勉強代が60元に上がった。

その後、九份へ着き、帰りのバスギリギリの時間まで粘り、キレイな九份を見て帰った。

(佐伯 明日香)

糸島市の福吉地区で2回目の
農園チャレンジ
「福ふく体験農園」の取り組み紹介
(準備編)

本田 正明

糸島市の福吉地区で「糸島まるごと農学校(以下、農学校)」をお手伝いしたのはもう9年前のこと。旧二丈町が合併して糸島市になる前でした。この事業は、九州大学との連携プロジェクトを、糸島学研都市構想の一環として実施した福岡県と二丈町の共同事業でした。当時は野菜の作付指導や座学を行う農園は少なく、九大農学部先生、地元の農家や種苗店などの農業関係者が講師になって指導を行うという珍しいプログラムでした。

私は農学校の立ち上げから3年間ほど関わらせてもらいましたが、糸島市の合併に伴い、担当者の移動やプロジェクトの位置づけが変わるなどして、いつの間にか疎遠になっていました。



西日本新聞の募集記事

農家の手ほどきを受けながら年間を通じて野菜を作り、収穫物を持ち帰る「福ふく体験農園」(事務局・井口賢治さん)が糸島市二丈福井に開設された。参加者を募集している。1区画(約30平方m)3万8000円。先着20組。

体験農園は区画を借りだけの市民農園とは違い、種苗や農具は開設者が用意し、プロの農家の指導付きで農業を学べるため、技術を覚えやすいのが特徴。福ふく体験農園では、近くの農家加茂正嗣さん(67)＝写真右＝らの指導の下、直売所「福ふくの里」そばの畑で、枝豆や落花生など20種類以上の野菜を減農薬で作る。

種まきや苗の植え込み、除草や芽かきのやり方など基本的な作業を学ぶ講習会は、5月8日から来年2月までの日曜日に10回程度実施。希望者は地域の農家と連携し、ミカン狩りやスイカ収穫、田植え、稲刈りなど、体験農園以外の作業にも携われるよう取り計らう。

現地はJR大入駅から徒歩20分。「未経験者でも大丈夫。一緒に楽しくやりましょう」と加茂さん。

締め切りは4月25日。問い合わせは事務局・井口さん＝090(9793)9382。

私自身の思いとしては農学校の運営ノウハウを地元で蓄積し、NPOなどの組織を立ち上げて継続的に実施できるようにしたいと思っていました。そのため、当初は3万円近い参加費をもらっていたのですが、行政が関わる事業で収益を上げることが問題視され、参加費を減額させられるなど、運営面で苦労したことを覚えています。

●3人で任意組織を立ち上げる

今回、再び福吉で農園事業に関わるようになったのは、福吉地区地域づくり協議会の井口さんとSNSを通じて知り合ったことがきっかけです。井口さんは福吉に移住し、映像製作などの仕事をされていますが、商工会や観光協会などの理事としての顔もあり、地域の振興に熱い思いを持っていました。

たまたま、福吉という地名つながりで農学校の話を出したところ、当時畑の指導をしてくれた農家の加茂正嗣さんが協議会の会長であり、農学校事業を再び実施したいと考えていることを教えてくれました。井口さんの仲介で福吉のスナックで加茂さんと再会。以前の農学校の活動記録すら渡していなかった不義理を恥ずかしく思いましたが、「ぜひ一緒に手伝ってほしい」と言われ、その場で協力を約束しました。

加茂さんと再会したのが年末年始の頃。春から農園を始めるには、すぐにでも事業母体を立ち上げる必要がありました。地元の協議会や直売所に母体になってもらおうと予算を使って大規模に実施できるかもしれませんが、意思決定に

時間がかかります。そのため、加茂さんと井口さんと私の3人で任意の母体をつくり、事業を進めながら必要なときに地元を協力を呼びかけようということになりました。

3人だとフットワークは軽いのですがお金がありません。補助金も頼らずに自分たちのできる範囲で事業を構築する必要があります。農学校では「座学」が魅力の1つですが、講師費用や調整が大変です。将来の農家を育成するつもりなら座学も必要ですが、都市住民との交流に力点を置くらなければなりません。限られた予算と時間の中でできる範囲を絞り込み、初めて野菜づくりを行う人を対象にした「体験農園」を実施することにしました。農地も直売所に近いなどアクセスが良く、規模も1反(約1千㎡)程度 of 場所を加茂さんが借りてくれました。

●区画の数よりも参加者の距離感を縮めたい

短い準備期間中、他の体験農園を見学したり、サイトなどを見ていると、どの農園も一区画が30㎡ぐらいで年間20種類ぐらい栽培しています。農機具小屋や休憩場所、水道の設置などの設備が充実した農園もあります。しばらく農園事業に関わらない間に状況はだいぶ変わっているようでした。

今回の圃場は1千㎡程度なので、1区画30㎡とすると最大30区画つくれます。人数が増えればグループを2組に分けて、土日別や時間別に分けた対応も考えられますが、受け入れ数を増やすより、むしろ人数は少なくとも、参加者と福吉地区の農家や地域との距離感を縮め、長く通ってもらえるような関係づくりを目指そうということになり、最低10組で最大でも20組とし、共用の畑をつくって収穫祭などの交流活動に活かそうと決めました。

ようやく「福ふく体験農園」という名称が決まり、募集内容を整理できたのが3月下旬。入学式やGWの話題が出始める前になんとかプロモーション活動を始めることができました。とはいえ、井口さんがつくってくれたチラシやFacebookでのネット配信が頼りです。4月初旬は参加者がまったく伸びず、本当に開催できるだろうかと不安になりました。体験農園の共著

もある西日本新聞の佐藤弘さんが写真付きで農園の紹介記事を書いてくれたことで、参加申し込みや問い合わせが増えはじめました。ほっとしたのもつかの間、熊本地震が発生し、取材のキャンセルや自粛ムードもあって参加者は伸び悩み、最終的には8組の参加になりました。なかなか思うように行きません。そして意外にも8組のうち4組は地元の福吉地区に移住した方の申し込みでした。

●お付き合いから生まれる「こと」の可能性

私個人の思いとしては、今回の野菜づくり体験を通じて、福吉地区の方々と参加者の接点をつくることで、交流人口よりもちょっと深い「お付き合い人口」を増やせないかと思っています。たとえば、現在の農村移住は、地域のイメージや家の立地条件で選び、隣近所の付き合いや地域のしきたりなどは後回しです。地域との相性が良ければいいですが、合わないケースもきっとあると思います。お試し居住などが人気なのも、少しでも地元の空気を肌で感じたいというニーズがあるからだと思います。具体的にはまだ調べてはいませんが、福吉地区でも空き家が増えているそうです。でも、ほとんど賃貸物件としては出てきません。

相続などの問題もありますが、農村では親戚などがいないと借りることが難しい状況です。農園を通じて素性がわかっていれば、地元から斡旋してくれる人が出てくるかもしれません。農村では、畑の管理が人柄の判断材料だったりします。

移住の話は理想ですが、「お付き合い」が始まれば、「相談」が生じ、「こと」が起こる可能性が生まれます。もっと都市の人と農村の人の交流の場ができることで、新しい地縁が生まれてくれればと思います。最初は4組の移住者の参加に驚きましたが、身近な交流が増えそうだととてもありがたく感じています。

まだ夏野菜の作付で手一杯の状況ですが、少しずつ参加者同士や農家との交流機会を増やしていければよいなと思っています。今回は野菜づくりの内容まで触れる余裕がなかったので、次回は野菜選びの苦労や参加者の反応など、農

園そのものの取り組み状況についても報告したいと思います。(ほんだ まさあき)

近 況

比叡山延暦寺、修行の道を50km走る

●英彦山で、現代版修験道を実現できないか

昨年度、福岡県添田町の人口ビジョン・地方版総合戦略の作成をお手伝いした。添田町には、北部九州最高峰、標高1100mの英彦山がある。英彦山は、「日本三大修験山」の一つに数えられる霊峰で、最盛期には800の宿坊が立ち並び、3,000人の山伏がそこで修行をしていたと言われる。

修験道の修行の中でも、最も過酷な修行の一つが「峰入り」と呼ばれる、英彦山を拠点に宝満山を往復するルート、福知山を往復するルートなど、最長130kmの行程を歩く荒行だ。峰入りを36回達成すると、大越家(だいおっけ)という山伏の最高位に達したそうだ。現在の英彦山周辺にも宿坊がいくつか残されており、「歴史的風致維持向上計画」の国の認定を受け、国の財政的な支援のもと、参道や宿坊の修復、復元などのハード整備に取り組む予定である。そこで、観光振興のソフト的アクションとして、現代版の修験道とも言える「トレイルラン」を開催してはどうかと提案したところ、総合戦略における施策の一部として盛り込まれることとなった。

その後、九州各地でトレイルランの大会をプロデュースしている九州トレイルランニング協会共同代表の椎山宗一郎さんに協力を依頼したところ、快諾をいただいたので、早速弊社の「地域ゼミ」の講師として椎山さんを招き、その場で添田町の担当の方々とのマッチングを行った。後は、どのような方向性のイベントとするかである。

昨年開催された大会で、提案した「現代版修験道」のイメージと近かったのは、「比叡山インターナショナルトレイルラン」である。大会名のサブタイトルには、「挑め、己の限界に」とあり、水平距離50km、累積獲得標高3,700m、



スタート地点は比叡山延暦寺の総本堂、国宝根本中堂前。国際レースだけあって外国人も多い

急な登りと下りが連続するハードなレースだ。同じような距離や獲得標高のコースは九州にもあるかもしれないが、比叡山延暦寺の境内をスタート・ゴールとしており、このコースの特徴となっている。英彦山トレイルランの参考になりそうだ。世界文化遺産でもある古刹を走るレースを体感したいと思い、エントリーした。

●そのイメージに近いものが、比叡山にある

博多から新幹線で京都に向かい、グループ会社のアルパック京都事務所を訪問・意見交換後、次の日の早朝に比叡山延暦寺に向かった。

比叡山延暦寺に到着したのは7時半頃だった。延暦寺会館で着替え、手荷物を預ける。延暦寺会館はこの日、ランナーに全面開放されており、1200人以上の日焼けしたランナーがぞろぞろいた。せっかくの機会なので、根本中堂や国宝殿などの文化財を見て回っていたら、スタート時間が近づいてきた。

レーススタート前に、大津市長や延暦寺の小堀代表からもご挨拶があった。その後お話をされたプロデューサーの鎬木毅さんが「この新しいスポーツに歴史ある延暦寺さんからご理解をいただき、全面的にバックアップをいただいたことに心から感謝申し上げます」とお話をされていて、本当に同感である。

9時にレースはスタートし、私は先頭グループのいい位置にポジショニングした。スタート

直後、比叡山最高峰の大比叡（標高 843m）まで登った後は、急なトレイルを一気に 500m 下る。この下りで、太ももが筋肉痛になり、早速、足が終わってしまった。トレイルを走るのは約半年ぶり。日頃は近場の神社の階段の登り降りなどでトレーニングをしていたが、早々に修行不足を痛感した。2月の別大マラソンで、ロードの自己ベストを更新（2:57:40）したので、まあまあ走れるだろうと思っていたのだが、マラソンとトレイルは別物であった。下った後はまた 300m 上り、スタートから水平距離 10km 地点の第一エイドステーション（水分や食べ物を補給する場所）に到着した。立ち止まって、コーラを飲みながら体調を確認すると、途中でリタイアせざるを得ないかも、と思うほど足が疲れていた。スタート当初は、8時間以内でゴールして、京都駅近くのお寺でも見に行こうか、おみやげを買いに足を伸ばそうかな、などと考えていたのだが、考えが甘かった。むしろ今日の最終電車で帰れるのか？といった状況だった。

第一エイドを出発した後は、スローペースに切り替え、「8時間切り」の目標を「完走すること」に切り替えた。この日の天気は曇りとはいえ5月末。昼が近づくと気温が上がってきて、全身汗だくになった。1時間に一回、100キロカロリー程度のジェルを舐め、背中に背負った水をちびちび飲みながらひたすら歩を進める。

第一エイドから 400m 下った後、今度は 500m の急な上りをクリアすると、スタートしてから 20km 地点の第二エイドである延暦寺会館に戻って来た。ここまで3時間。しばし座り込み、振る舞われたお蕎麦を2杯いただいた。汗を大量にかいていたこともあり、つゆの塩分が非常においしく、ありがたく感じた。お蕎麦を食べ終わったら、「子どもたちに示しがつかないし、行けるところまで行ってみよう」と気力も湧いてきて、後半戦スタート。

後半も激しいアップダウンの繰り返しで、特に一番の難所「せりあい地藏」までは歩いて登るのがやっとの急坂を 500m 一気に登る。全身の毛穴から汗が吹き出し、息を切らしながら登り終える。途中のエイドで地元自治会の方々に



エイドステーションには、素麺やおにぎり、漬物、饅頭などが並び

用意いただいた素麺やおにぎり、キュウリの塩漬けなどを有り難く、おいしくいただいた。

後半は少しの下り坂でも足が痛く、早歩きのような状況になりながらも足を進めると、ゴールがあと 10km、5km と近づいてくる。そして最後は鍋木さんが「一番の見所」とおっしゃっていた水平距離 2km、高低差 300m の激坂である。ここまで既に 8 時間が経過しており、その間ほとんどずっと胃が上下に揺さぶられていたせい、ムカムカと吐き気もする。激坂の手前にボランティアの方がおられたので、「これを登るのかあ。吐きそう」と言ったら、「吐いてから登ったらえんとちやいます？」との関西っぽい返事で笑えた。走ることなどできないような急な坂を一歩一歩ゆっくり上る。

今回のレースは、比叡山で最も厳しい修行の一つ、千日回峰行のコースと一部重なっている。千日回峰行とは、文字通り 1000 日間、30～84km の道のりを歩く修行である。達成までに 7 年を要する過酷さで、第二次世界大戦後、この行を終えた人は 13 人しかいない。比叡山に来る道中で、司馬遼太郎の「叡山の諸道」を読んだが、千日回峰行に挑戦した行者は、達成者以外は生きて帰ってくることが許されておらず、行き倒れるか、諦めるならば自害するしかなかったそうだ。実際、最後の坂の両脇には、行者の墓が沢山並んでおり、比叡山の修行の厳しさを物語っていた。

仏に近づくために多くの修行僧たちが歩んだ道を、1,200 人の同士と一緒に、汗水たらしながら歩くのは貴重な体験だった。きつさもここ



ラスト 1km の急な坂道の横には、行者の墓が立ち並び

まで来ると、フーフー言いながら坂を登っている自分が、滑稽に思えて笑えてくる。最後は沿道で応援してくれた僧侶の方々や、ボランティアの皆さん、トレイルランナーの方々とハイタッチし、ありがとうと言いながらゴールに向かう。スタートからゴールまで 8 時間半の長い旅路だった。ゴールの瞬間は達成感、安堵感があった。順位やタイムは後半まったく気にならず、とにかく自分に勝てたことが嬉しかった。結局京都駅に戻ったのは 20 時だった。バタバタとおみやげを買って、終電一本前の新幹線で博多に戻った。胃のむかつきは博多に戻るまで続き、やっとご飯を食べることができたのは深夜 0 時だった。(どうも自分は胃腸が強い方では無いようなので、次からは固形物は少なめ、ジェル多めにしよう。)

●自分を追い込んだ境地に見えてくるもの

自分は持久系のスポーツが好きで、マラソン、トライアスロン、トレイルランの経験があるが、同じ距離ならトレイルランが抜群にきつい。何が楽しくて、そんなにきついこととするの？とよく聞かれるけれども、やめたい、やめたいと思いながら壁を乗り越えていくと、新しい自分が見えてくるのが面白い。この距離は乗り越えることができた、その後は体が 1 週間ボロボロになった。次はもう少し距離を伸ばそう、そうしたらまた 1 週間体がボロボロ、というように、自分が少しずつ変化し、強くなっていくことを感じられる。それは多分スポーツのことだけではなく、仕事も、家庭も一緒である。新しい環境への適応や身体の変化が楽しくて挑戦してい

る感じた。

●そこにある自然、歴史、文化と現代のスポーツとの融合、外と中とのふれあい

「一隅を照らす、これ則ち国宝なり」比叡山を開いた伝教大師最澄の言葉で、大好きな一文だが、今年是最澄生誕 1250 年になるそうだ。そうした比叡山延暦寺の長い歴史、育まれた文化、自然と新しいスポーツの融合、外から来た人たちと地元の人達のふれあい、この日この場所には、様々な要素が絡み合った不思議な空間、時間があつた。こういう場があるのも、比叡山延暦寺に新しい文化を受け入れてくれる度量があるからこそ。そして、主催者である MT Hiei トレイルランニング実行委員会の皆様のご尽力のおかげである。我々ランナー達は、そうした思いに感謝しながら、ハイカーさんや参拝者への配慮、自然環境の保護など、約束事を守らなければならない。

九州にも、歴史ある古道、物語のある道は無数にある。そうした、そこにしかない要素と、現代の世界的なトレンドをかけ合わせると、面白い場ができるのではないかな。今後、一日限りのお祭りとしてのレースプランニングや、日常的な賑わいを生むマラニック（マラソン+ピクニック）やサイクリングルートづくりに関わることができればと思う。（原 啓介）

【総】有明海の新名所！？クモデ網漁を体験する

「クモデ網漁は有明海の夕日も見られて最高ですよ」と九州芸文館の安西さんの話を聞いたのは半年ほど前のこと。携帯電話の写真を見せてもらいながら、「クモデ」とは網が蜘蛛の巣みたいな形なのだと理解しました。有明海では昔から行われてきた伝統的な漁でスズキやウナギが上がることもあったとか。これから着地型観光の目玉になりそうだという話を聞いて、ぜひ体験しようと筑後市の方々と一緒に行ってきました。

●柳川の観光振興のために復元

クモデ網漁を一般の人が漁業体験できるようになったのは実は平成 27 年と最近です。柳川市観光課の中島さんは、「最初はムツゴロウを売りだそうと始めたんですよ」と教えてくれま



有明海に面して並ぶクモデ網

した。

柳川市観光の滞在時間を伸ばそうと平成 26 年にルアーでムツゴロウを釣る「ムツかけ」体験を始めました。しかし、干潮時にしか体験できなかったため、目をつけたのが「クモデ網」だったそうです。クモデ網漁であれば干満問わず、いつでも体験できます。ただ、実際漁に使える網をつくるため、漁協のクモデ部会などの協力を得ながら、口伝で伝わっていたクモデ網を再現したのだそうです。

ムツかけは慣れるまで少し技術がいるらしく、今はクモデ網体験の利用が増えているのだとか。網も 7 基ほど設置し、現在は団体客なども受け入れられるようにインストラクターの育成に力を入れているそうです。

●網を引くだけのシンプルな漁

有明海の海岸に広がる巨大な堤防に登ると、数基のクモデ網が見えました。さっそく、そのうちの 1 基に足を運ぶと、インストラクターの森さんが待機してくれていました。櫓（やぐら）は、口伝通り、軽量の木材で組み立てられた質素なもの。大人数で乗ったら重量が大丈夫かなと心配してしまいます。

釣り方は、縄を緩めて静かに網を下ろし、網の上を魚が通っていると想像し、自分のタイミングで網を引き上げるだけです。縄に足を取られて海に落ちないように気をつければ、子どもでもできます。実際に夏休みは親子連れが多いのだそうです。

ものは試しとさっそく最初の挑戦者が引き上げると、見事に 2 匹のコハダが入っていました。網から魚をタモですくうにはコツがいるらしく、森さんが手伝ってくれます。さて私の番



シロウオに似たトンサンウオ

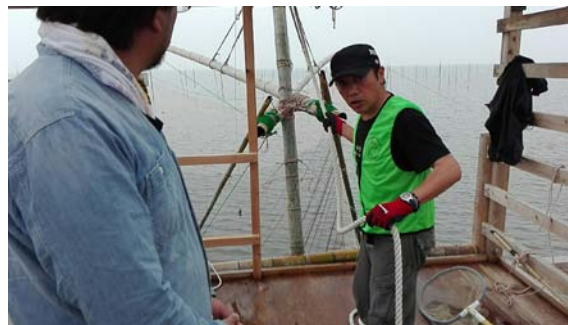
です。網を降ろして間をおかずに引き上げたためか、何も入っていません。残念と思いながら網を海に戻そうとすると、「待ってください。非常に珍しい魚が入っていますよ」と森さんが教えてくれました。よく目を凝らすと、シロウオのような透明な魚がはねています。地元ではトノサンウオと言われているそうです。頭を取ってそのまま食べられると聞き、さっそくその場で食べました。特に味はなく、コリっとした食感を楽しむようです。

●インストラクターはデザイナー

網を引くだけの単純な漁ですが、何が捕れるかわからない「運試し」の感覚があり、大物を夢見て何度も網を引きたくなります。ただ、大人の男性でもかなりの力があるため、2～3回続けると腕が疲れてきます。漁は1時間単位の料金なので4～5人で交代しながら釣るのがよさそうです。インストラクターは女性が網を引くときのサポートや魚の種類や料理法を教えてください、コノシロを食べてくれたりといろいろとお世話をしてくれます。森さんの職業を伺うと、本職はデザイナーでパンフレットなどを作成していると聞き、参加者のみんなが本業とのギャップに驚いていました。柳川の川下りの船頭や地域づくりの活動も熱心にされているそうです。また別の機会に、話を聞いてみたい方でした。

●クモデ網のファンづくり

取れた魚は、地元の寿司屋に持ち込み、マエビとコノシロは刺し身、コハダは唐揚げにしてもらいました。柳川の地酒「国の寿」を飲みながら、有明海の幸を楽しむという、最後まで柳川の魅力を堪能しました。



インストラクターをしていただいた森さん



刺し身でいただいたマエビとコノシロ

今回の参加者の感想を聞いてみると、クモデ網は柳川の川下りやうなぎにも負けないくらい魅力的だと口々にいっていました。私もまた子どもを連れて来たいと思いました。一方で単純な漁のためか、知らない人に魅力を伝えるのが難しかったり、魚が多い潮目の時間に行程を左右されるという問題もわかりました。でも一度体験するとまたやりたくなる不思議な魅力があります。まずは自分がクモデ網体験の応援団となって、口コミでファンが増えればと思います。また近々体験しにいかうと思っているので興味を持たれた方はご一報ください。

(本田 正明)

🎨 語り絵倶楽部～新宮町相島にてスケッチ

前回のよかネットでご紹介した大人のスケッチ倶楽部「語り絵倶楽部」の第4回目の実習場所は、相島であった。

相島は、新宮漁港から北西7.5km、町営渡船でわずか17分、周回道路沿いで1周しても5.4kmという小さな島である。

私も10数年前に仕事で行って以来、2回目の訪問である。

今では猫の島として有名となっており、猫を目当てに海外からもお客さんが来ているよう



島1軒の食堂にて刺身定食で昼ご飯、
(新鮮な地魚の刺身、サザエ飯、魚ロッケ、アサリの
吸い物、冷や奴、サラダ、お新香)



鼻面半島とめがね岩（鼻栗瀬）あいにく雨で
霞んでいるが、晴れの日の絶景が想像される

で、港近くには、英語で「猫には餌を与えない
ください」の看板が目立つ。

当日は、あいにく小雨模様。不安のなかで待
ち合わせ場所の西鉄貝塚線終点「新宮」で降り
ると既に講師兼倶楽部部長の中山寛さんが来ら
れており、一安心。その後、予定の6人全員が
揃い、新宮駅から松林を抜け、海岸沿いの道を
20分ほど歩いて渡船場に到着した。この渡船場
までのコースは、景色を楽しみながら歩けるの
で、さほど距離を意識することはなく、なか
なか良いコースである。

相島の渡船場に到着すると、島に1軒しか
ない「丸山食堂」に直行。刺身定食は、名物のラ
ブコロッケ（ハート型の魚ロッケ、ハート型な
のは相島を南北逆さまに見るとハート型に見
える）と新鮮な地魚、サザエ飯、アサリの吸
い物がついて1,200円とリーズナブルである。

充分、腹ごしらえをした後、散策兼ねての
スケッチの場所である鼻面半島へ移動。ここ
で思い思いに30分ぐらいスケッチをしている
と、本降りとなったため、積石塚群の一角に
ある東



急きょ、東屋での緑の色彩実習

屋に避難し、急きょ、葉っぱの緑の色彩実習と
あいなった。

その後、相島のビューポイントの一つである
断崖絶壁の滝段を眺め、渡船場へと戻った。

今回は、天候の関係もあって、スケッチする
時間は短かったが、相島の食と優れた景色を充
分楽しむことができた。

今後は、気候を見計って、再度、プライベート
で、スケッチに挑戦してみようと思った。

(山田 龍雄)

編集後記

 政府は、熊本地震の風評被害対策として
割引率最大7割の九州観光支援旅行券を7月
から発売すると発表しました。これに先立ち、
6月20日に天草市が5割引きの宿泊券を販
売し、3,300枚がすぐ完売したそうです。こ
の機会に九州観光をぜひご検討下さい。(は)

よかネット No. 123 2016.7

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

(株)地域計画・名古屋